

(三) 居合腰、抜附、血振

居合術で重要なのは、まず自由自在に動くことのできる姿勢をとることです。香取神道流の居合腰は、右足を少し前に出して左膝をつきます。そして、両足のつま先を立てて、左右の踵に七対三の割合で重心をとります。

また、背筋は真っ直ぐにします。この姿勢をとれば、前後左右自由に身を捌さばき、様々な状



居合腰では、背筋を真っ直ぐにし、左右の踵に7対3の割合で重心をとる

況に素早く対応できるようにします。

抜附ぬきつけの方法は、まず、左手で鯉口こいくちを握り、親指と人さし指を鐺つばの両側にかかけます。これは、後ろから鞆たばを抜かれたり、柄を取られて刀を奪われないようにするためです。そして、親指で鐺を押して鯉口を切ります。

右手は手のひらを上にし、柄の真ん中に乗せます。これは、衣類の袖を肘のほうに落とす、手首の返し（スナップ）を使って刀を抜くために行います。この手首の効かせ方は、柔術の



親指と人さし指は鐺の両側にかける



右手は手のひらを上にし、
柄の真ん中に乗せる

節であらためて紹介しますが、手刀でもその威力を發揮します。手刀をつくり、力を抜いて素早く手首を返せば、空気を切る音が聞こえ、鋭く打つことができるでしょう。

納刀の前には血振ちぶりを行います。当流の血振は特徴的で、残心で手元に刀を引いた後、構えた状態から右手で刀を一回転させて（このとき手元で刀を回転させるために、左手を一瞬緩めます）、右拳で柄を叩きます。

以前、刀を水に濡らして血振りを検証してみましたが、実際には、きれいに水を切ることができませんでした。したがって、この動作を極まめることで本当に血を落とせるかどうかはわかりません。しかし、一本一本の技の「区切り」という意味もあるのではないかと考えています。



右手で刀を一回転させ、拳で柄を叩く

(四) 握り

柄の握り方は剣術と同じで、左手は柄頭いっぱい持ちます。柄頭を一寸ほど残して持った場合と比べると、その差で「テコ」の力が何倍も違うのがわかります。

私が十九歳のときの話です。林弥左衛門先生が、乾いた藁わらの束を物干し竿に吊るし、刀で斜めに切り落としたと話されました。当時、私の家では馬を飼っており、厩うまやには大量の藁わらがありました。自分もさつそくやってみようと思ひ、直径二〇センチほどの藁わらの束を作りました。納屋にある農作業用の台の上に本を置き、その上に藁わらの束を横たえ、愛刀伊賀守金道いがかみきんみちを握りました。そして、藁わらの束をめがけ、思い切り振り下ろしました。しかし、結果は刃がほとんど入らず、かろうじて切れた藁わらは、数えてみればわずか十二本でした。

実は、濡れた藁わらであれば、剣術などまるで知らない者でも簡単に切ることができず。しかし、乾いた藁わらにはなかなか刃が入らず、うまく切りつけなければ弾はずんでしまい、一刀両断とはいかないのです。